

【調査サマリー】

建設 DX の現状は、回答者の半数以上がデジタル化に着手、約 3 割が DX の効果を実感。

建設 DX で「業務プロセス、組織やビジネスモデルも変わってきた」が 10.7%との結果。

調査実施概要（調査元：BuildApp 総合研究所）	
調査期間：2025 年 3 月 21 日～3 月 31 日	回 答 数：1,257 人
調査対象：全国の 20 代～70 代の建設産業従事者 1,257 人	調査方法：インターネット調査（ゼネラルリサーチ株式会社）

【目次】

1. 「建設 DX の現状」（単一回答）	2
1-1. 年代別	2
1-2. 会社種類別	3
1-3. 役職別	3
2. 「BIM/CIM などのデジタル活用」（複数回答）	4
2-1. 会社種類別（BIM・CIM を省人化・省力化を目的に活用できている割合）	5
3. 「アナログ業務が多く効率化が遅れているプロセス」（複数回答）	6
3-1. 2023 年～2005 年比較（アナログ業務が多く効率化が遅れているプロセス）	6
4. BIM の活用シーン（複数回答）	7
4-1. 前年度比較（BIM の活用シーン）	7
4-2. BIM に期待すること	7
5. デジタル化未対応による仕事の不安（単一回答）	8
5-1. 従事業務別（デジタル化未対応による仕事の不安）	9
5-2. 年代別（デジタル化未対応による仕事の不安）	9
6. 建設産業従事者が誇りに思っていることと「深刻な課題」	10
6-1. 2023 年～2025 年度比較（人手不足の深刻さ）	11

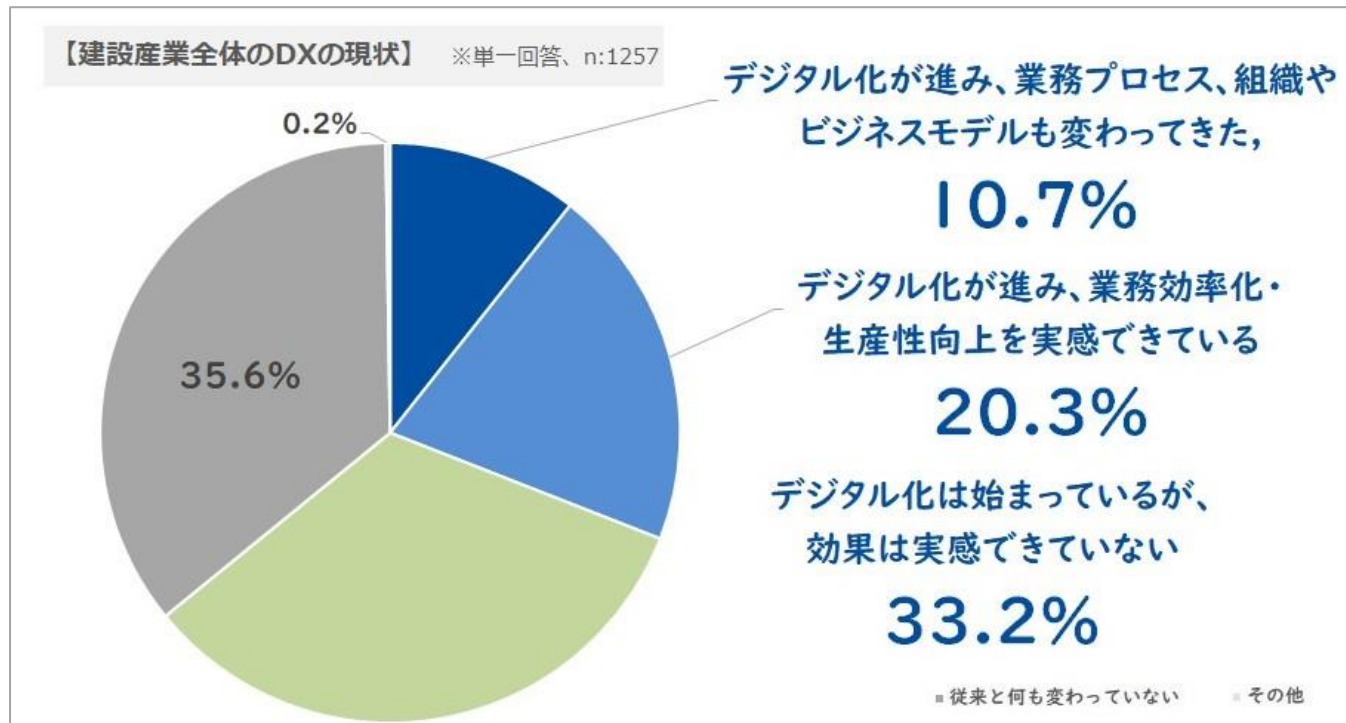
【結果要点】

- 【建設 DX の現状】回答者の 64.2%がデジタル化に着手、31%が効果を実感しているとの結果になりました。建設 DX の効果として「業務プロセス、組織やビジネスモデルも変わってきた」との回答は 10.7%でした。なお、年代別にみると、次世代リーダー層は約 4 割が建設 DX による変化・効果を実感していることがわかりました。
- 【BIM/CIM などのデジタル活用】官民で注力する「BIM/CIM」を、省人化・省力化を目的に活用できているとの回答は 17.1%にとどまり、会社種類別ではスーパーゼネコンでは 41.9%、専門工事会社では 2%と、対照的な結果になりました。なお、省人化・省力化を目的に「活用できているデジタルツールはない」との回答は 29.8%でした。
- 【アナログ業務が多く効率化が遅れているプロセス】最多回答は「施工管理（33.3）%」で、2023 年から 2 年間で 10.2 ポイント上昇していることから深刻さが増していると推測できます。なお、3 位「施工・専門工事（27.2%）」は 2 年間で 8.6 ポイント減少しており、徐々にデジタル活用が広がっていると推測できます。
- 【BIM 活用】BIM の活用シーンは 1 位「設計（38.7%）」、2 位「施工（30.6%）」、3 位「割付・積算（18.3）」で、昨年同様の結果でしたが、前年に比べ、2 位「施工（30.6%）」は 19.5 ポイントアップしたほか、製造、維持管理など設計以外のプロセスでも BIM 活用が増加傾向にあることがわかりました。
- 【デジタル化未対応による仕事の不安】「デジタル化に対応できないと将来仕事が減るのでは、という不安」がある方は全体の 61.8%で、2023 年調査、2024 年調査とほぼ変わらない結果でした。
- 【建設産業従事者が思う誇りと課題】建設産業従事者が誇りに思っていることは「社会貢献度が高い（42.5%）」、深刻な課題は「人手不足（59.9%）」がトップでした。人手不足の深刻さは、2023 年から 2 年間で 3.4 ポイント上昇しており、人手不足は解消のめどが立っていないと推測できます。

1. 「建設 DX の現状」（単一回答）

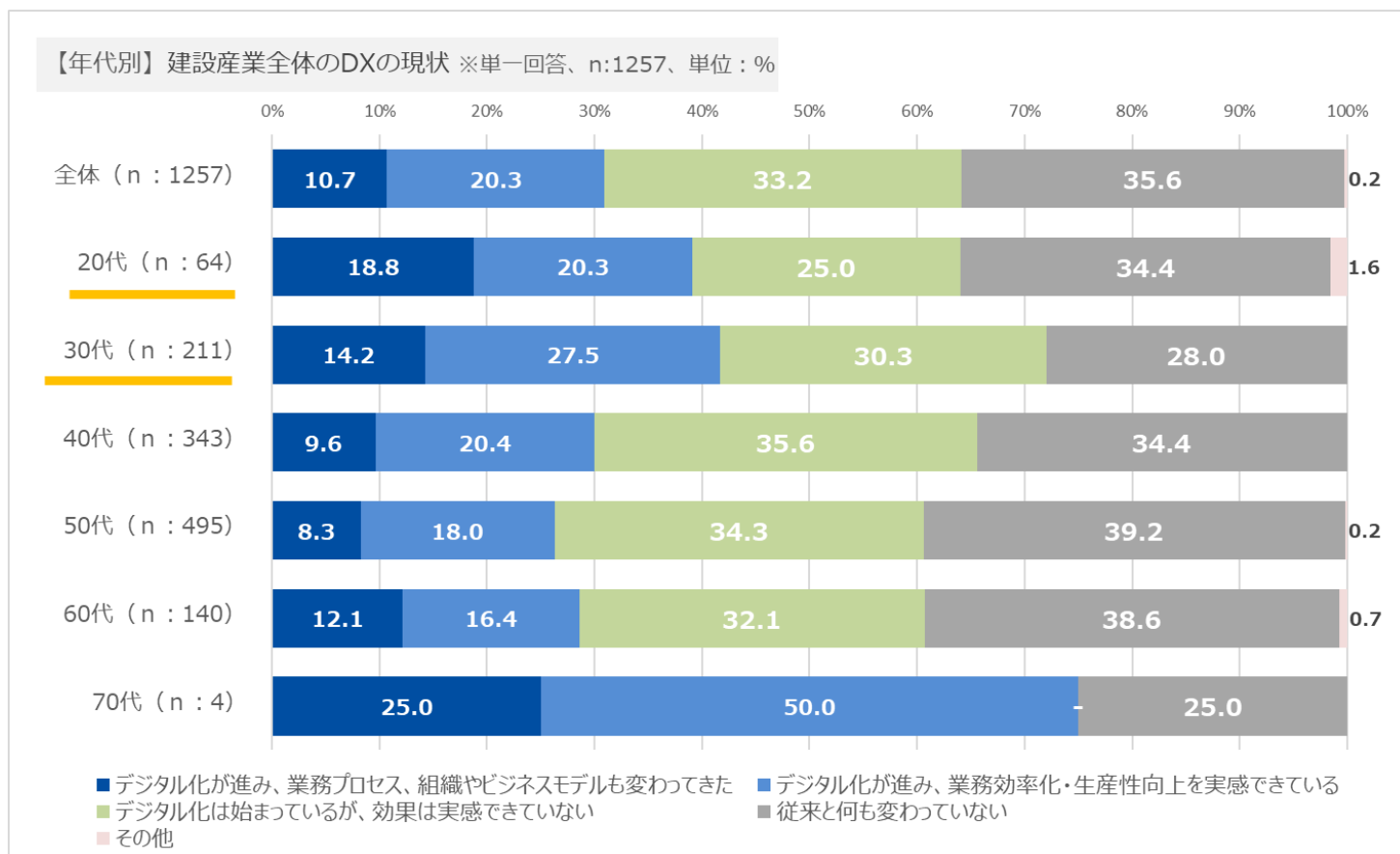
建設 DX の現状について質問したところ（単一回答）、「デジタル化が進み、業務プロセス、組織やビジネスモデルも変わってきた（10.7%）」、「デジタル化が進み、業務効率化・生産性向上を実感できている（20.3%）」
「デジタル化は始まっているが、効果は実感できていない（33.2%）」、「従来と何も変わっていない（35.6%）」との結果となりました。

このことから、建設 DX の現状は、64.2%がデジタル化に着手、31%が効果を実感していると言えます。



1-1. 年代別

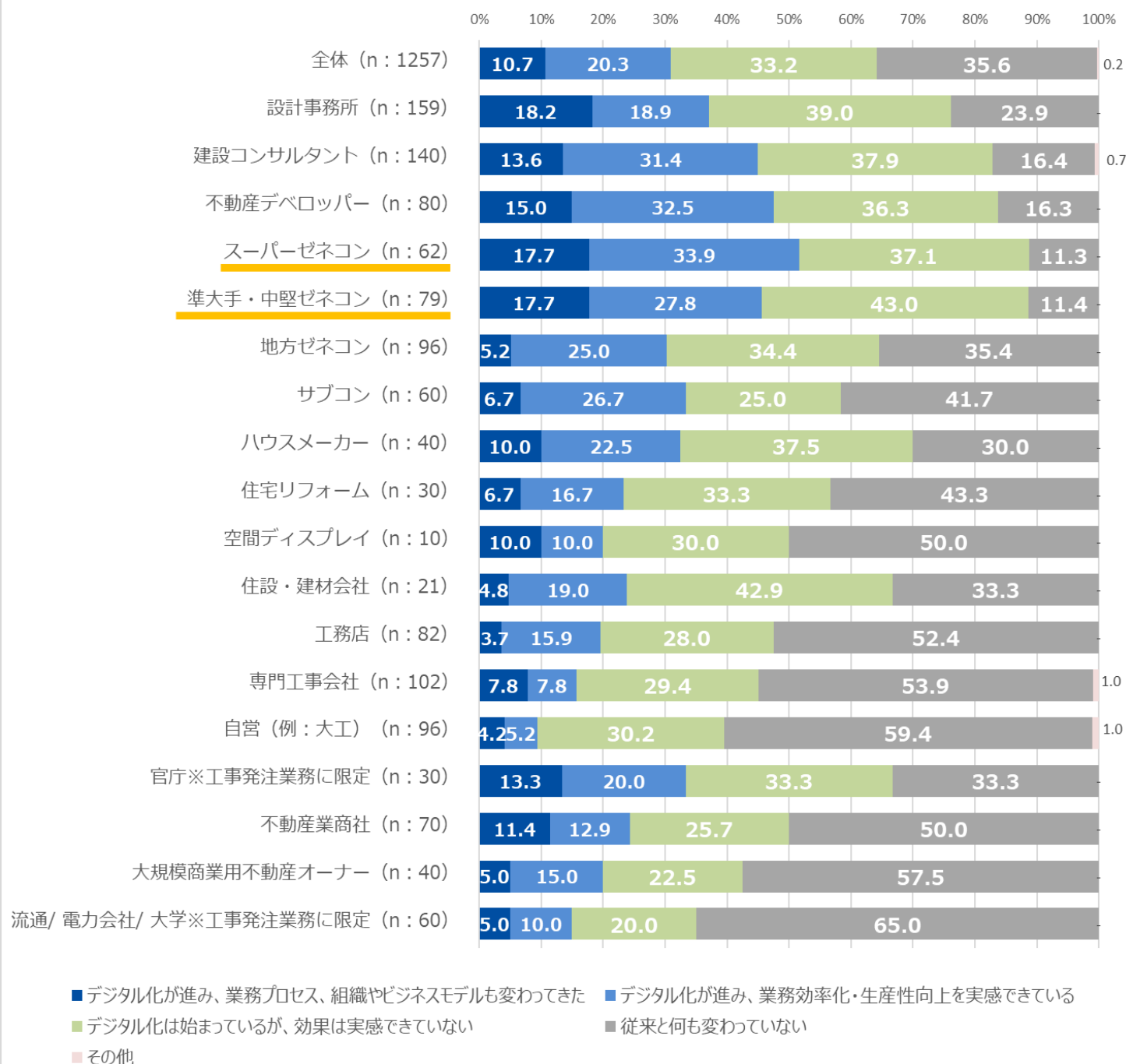
年代別に「建設 DX の現状」に対する考えを見てみると、20 代、30 代といった次世代リーダー層では、「デジタル化が進み、業務プロセス、組織やビジネスモデルも変わってきた」または「デジタル化が進み、業務効率化・生産性向上を実感できている」との回答が他の年代に比べ多いことが分かります。



1-2. 会社種類別

会社種類別に「建設 DX の現状」に対する考えを見てみると、スーパーゼネコン（n:62）、準大手・中堅ゼネコン（n:79）、では「デジタル化が進み、業務プロセス、組織やビジネスモデルも変わってきた」または「デジタル化が進み、業務効率化・生産性向上を実感できている」との回答が多い傾向が分かります。一方で、地方ゼネコン、サブコン、専門工事会社など現場に近い業態の会社ほど、「従来と何も変わっていない」との回答が多い傾向となっています。

【会社種類別】建設産業全体のDXの現状 ※単一回答、n:1257、単位：%



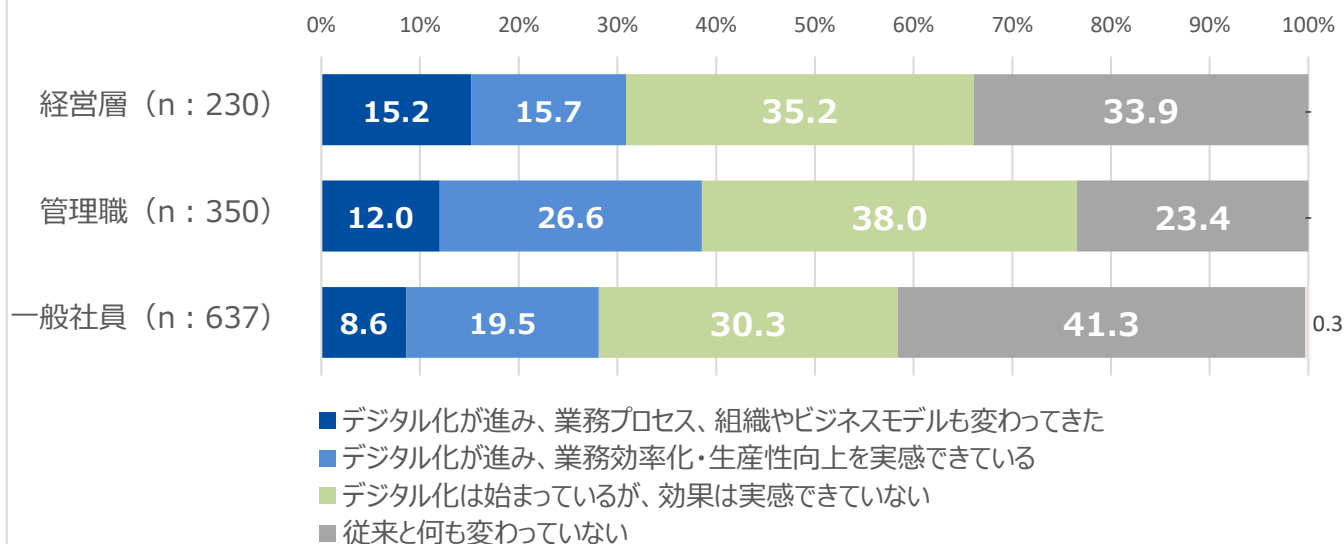
1-3. 役職別

役職別に「建設 DX の現状」に対する考えを見てみると（n:1217/全回答者 1257 名から役職「その他」40 名を除外）、「デジタル化が進み、業務プロセス、組織やビジネスモデルも変わってきた」との回答比率は、

経営層（n:230）が15.2%、管理職（n:350）が12.0%、一般社員（n:637）が8.6%であり、経営層と一般職員では建設 DX の現状認識に大きな差があると推測できます。

【役職別】建設産業全体のDXの現状

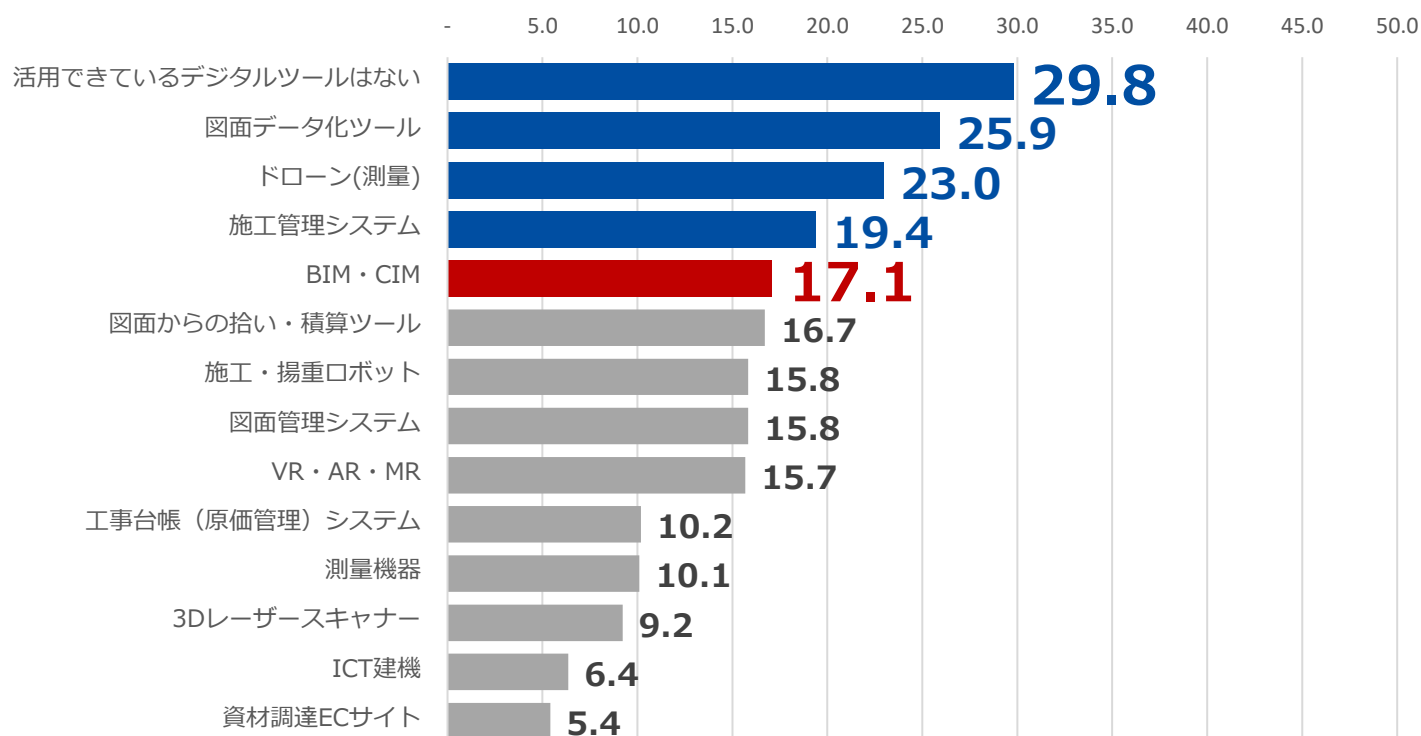
※単一回答、n:1217（全回答者1257名から役職「その他」40名を除外）、単位：%



2. 「BIM/CIMなどのデジタル活用」（複数回答）

「省人化（生産性向上）や省力化（業務効率化）を目的に、活用できているデジタルツールを教えてください（複数回答可）」と質問したところ、官民で注力する「BIM・CIM」を、省人化・省力化を目的に活用できているとの回答は17.1%にとどまりました。

【省人化・省力化を目的に活用できているデジタルツール】※複数回答、n:1257、単位：%

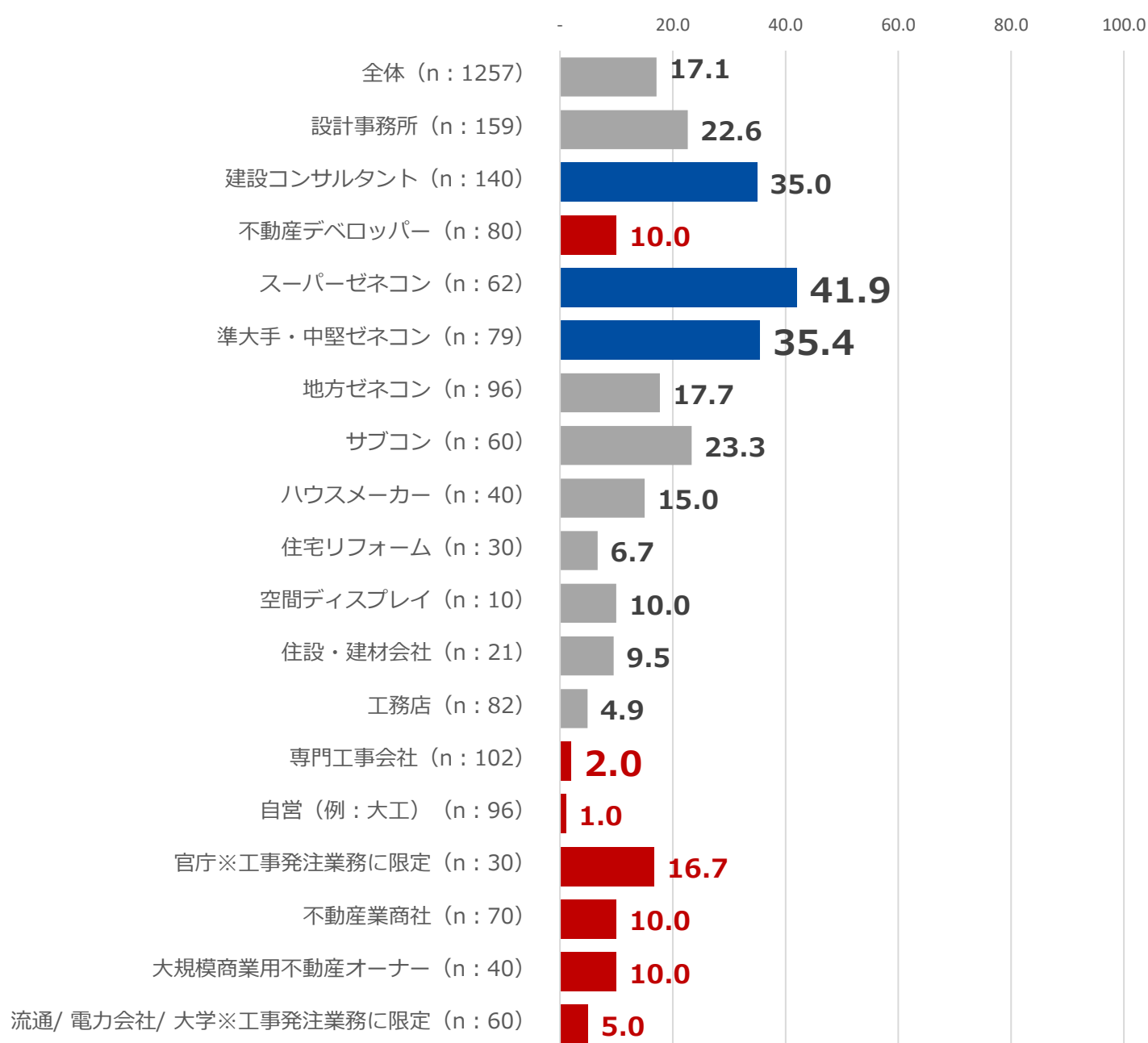


2-1. 会社種類別（BIM・CIM を省人化・省力化を目的に活用できている割合）

会社種類別に「BIM・CIM を省人化・省力化を目的に活用できている割合」を見てみると、建設プロジェクトの上流工程で関与する建設コンサルタント（n:140）で 35.0%、スーパーゼネコン（n:62）では 41.9%、準大手・中堅ゼネコン（n:79）で 35.4%と、いずれも建設産業全体（n:1257）の 17.1%の倍以上でしたが、専門工事会社では 2%と、対照的な結果になりました。

また、建築主（工事発注者）に該当する不動産デベロッパー（n:80）では 10.0%、官庁（n:30）は 16.7%、不動産業商社（n:70）と大規模商業用不動産オーナー（n:40）は 10.0%、流通/電力会社/大学（n：60）は 5.0%と、いずれも建設産業全体（n:1257）の結果よりも低いことがわかりました。

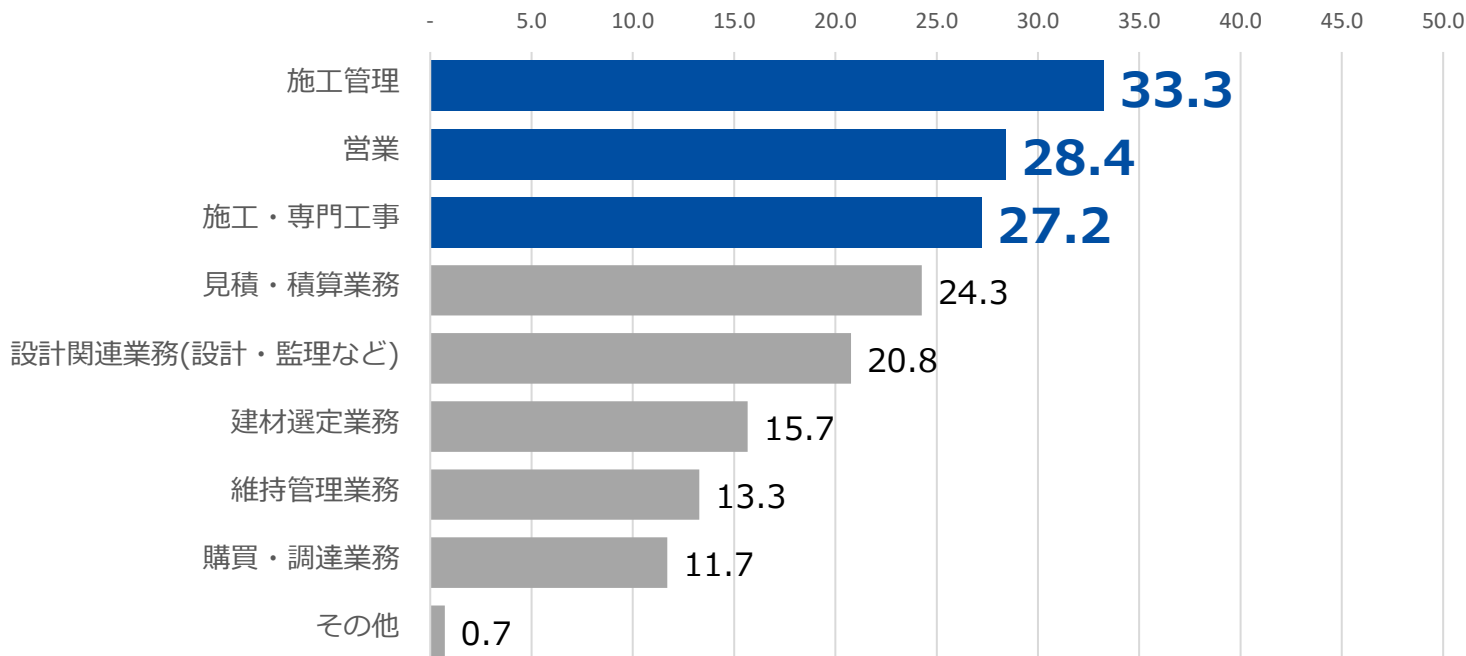
【会社種類別】省人化・省力化を目的にBIM・CIMを活用 ※複数回答、n:1257、単位：%



3. 「アナログ業務が多く効率化が遅れているプロセス」（複数回答）

アナログ業務が多く効率化が遅れているプロセスについて質問したところ、1 位「施工管理（33.3）%」、2 位「営業（28.4%）」、3 位「施工・専門工事（27.2%）」でした。

【アナログ業務が多く効率化が遅れているプロセス】※複数回答、n:1257、単位：%

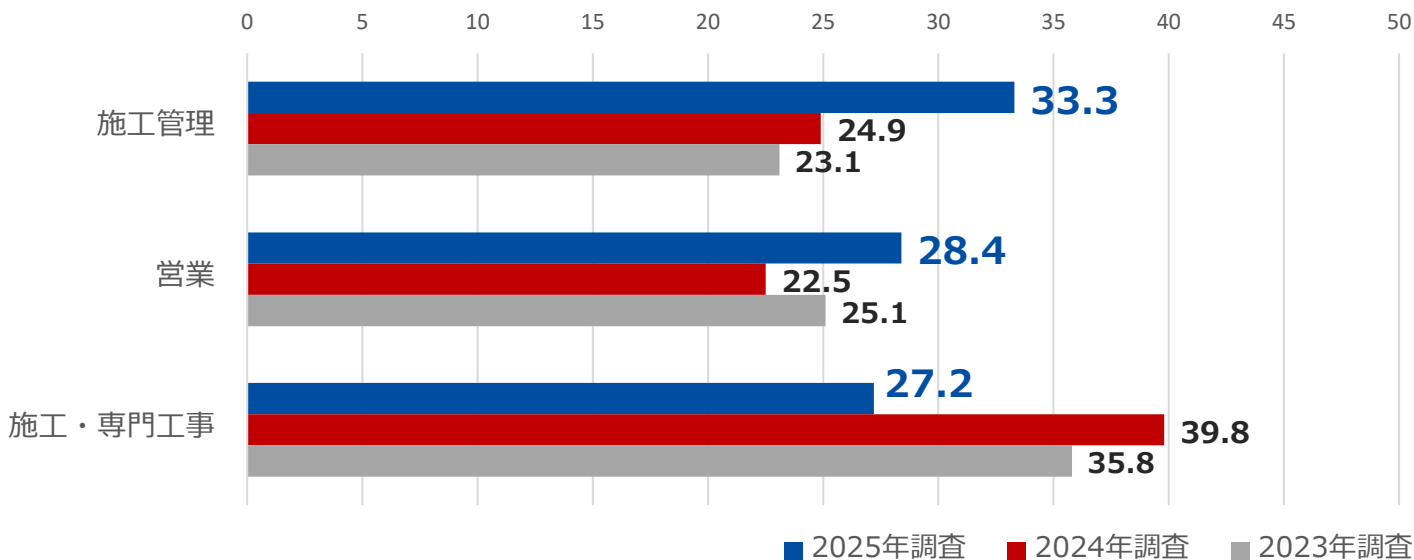


3-1. 2023 年～2005 年比較（アナログ業務が多く効率化が遅れているプロセス）

アナログ業務が多く効率化が遅れているプロセスの 1 位「施工管理（33.3）%」は、2023 年から 2 年間で 10.2 ポイント上昇していることから深刻さが増していると推測できます。一方で、3 位「施工・専門工事（27.2%）」は 2 年間で 8.6 ポイント減少しており、「施工・専門工事」では徐々にデジタル活用が広がっていると推測できます。

【2023-2025年推移】アナログ業務が多く効率化が遅れているプロセス

※複数回答、単位：%



4. BIM の活用シーン（複数回答）

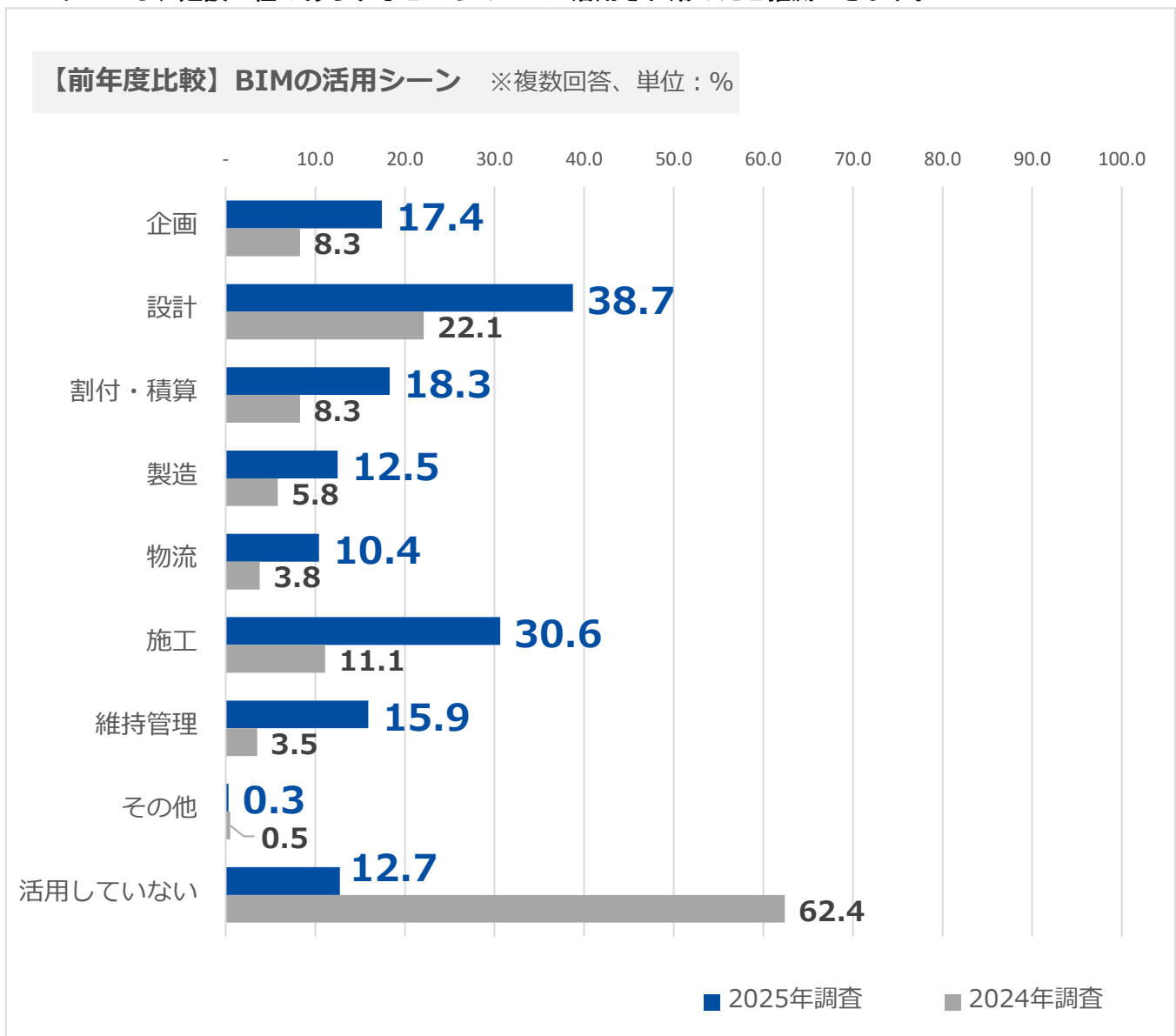
BIM の活用シーンは、1 位「設計（38.7%）」、2 位「施工（30.6%）」、3 位「割付・積算（18.3）」で、昨年同様の結果でした。

4-1. 前年度比較（BIM の活用シーン）

BIM の活用シーンの結果を前年と比べてみると、2 位「施工（30.6%）」は 19.5 ポイントアップしたほか、製造で 6.7 ポイント、維持管理で 12.4 ポイントと、設計以外のプロセスでも BIM 活用が増加傾向にあることがわかりました。

また、BIM を「活用していない」との回答が前年の 62.4% から大幅減の 12.7% になっています。

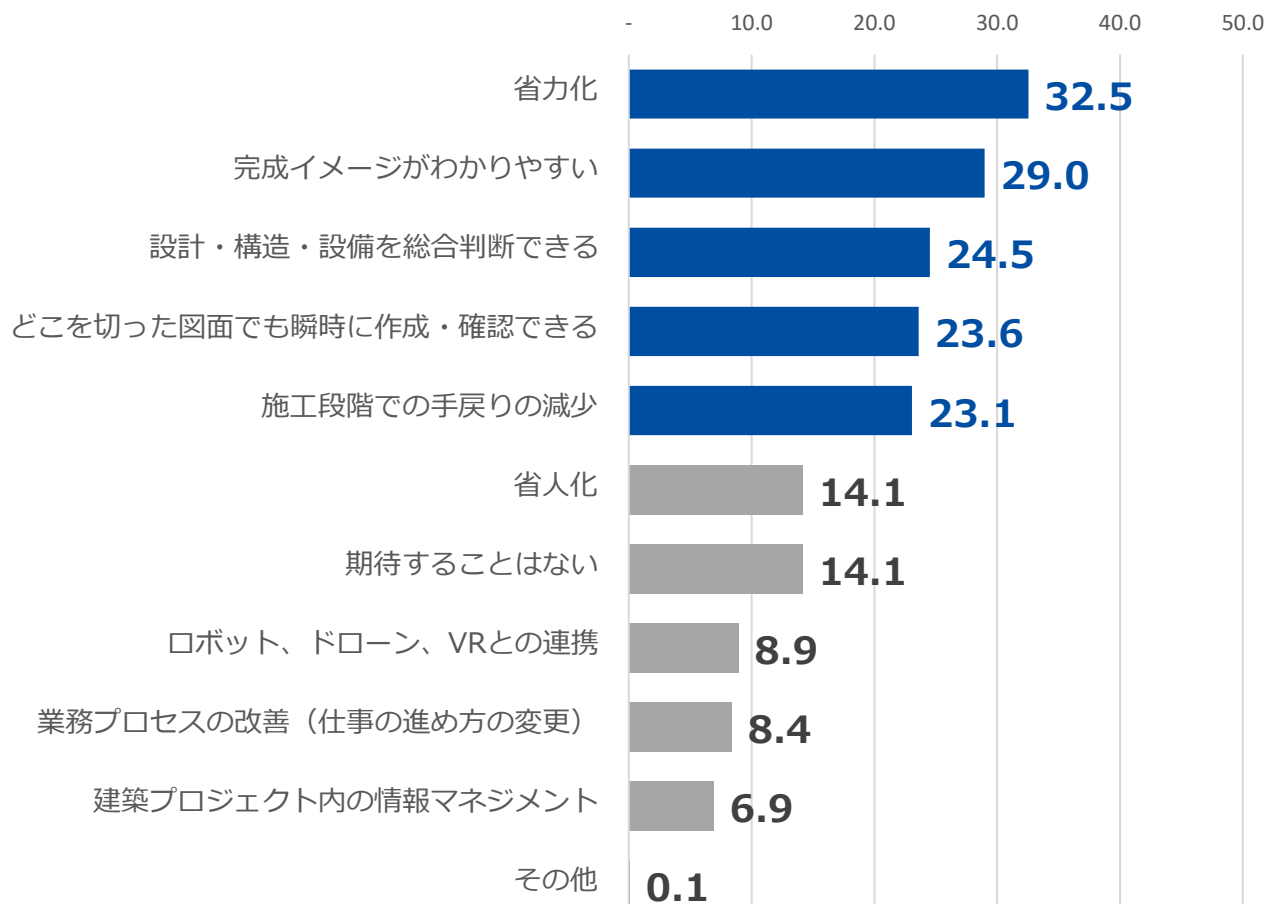
以上から、建設工程のあらゆるところで BIM が活用され始めたと推測できます。



4-2. BIM に期待すること

BIM に期待すること（複数回答）は、1 位「省力化（業務の負担軽減・効率化）（32.5%）」、2 位「発注者から技能工まで完成イメージがわかりやすい（29.0%）」、3 位「設計・構造・設備を総合的に判断できる（24.5%）」、4 位「どこを切った図面でも瞬時に作成・確認できる（23.6%）」、5 位「施工段階での手戻りの減少（23.1%）」でした。

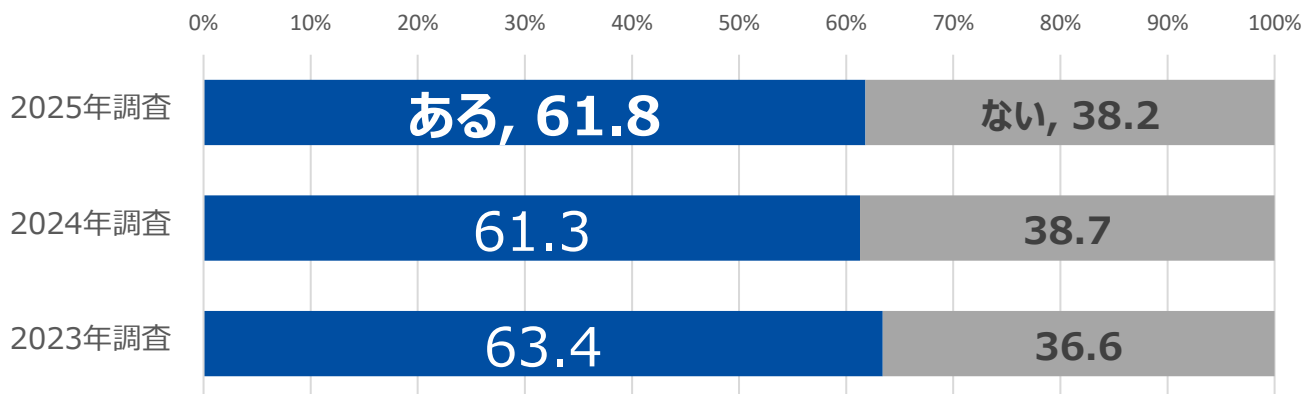
【BIMに期待すること】 ※複数回答、n:1097、単位：%



5. デジタル化未対応による仕事の不安（単一回答）

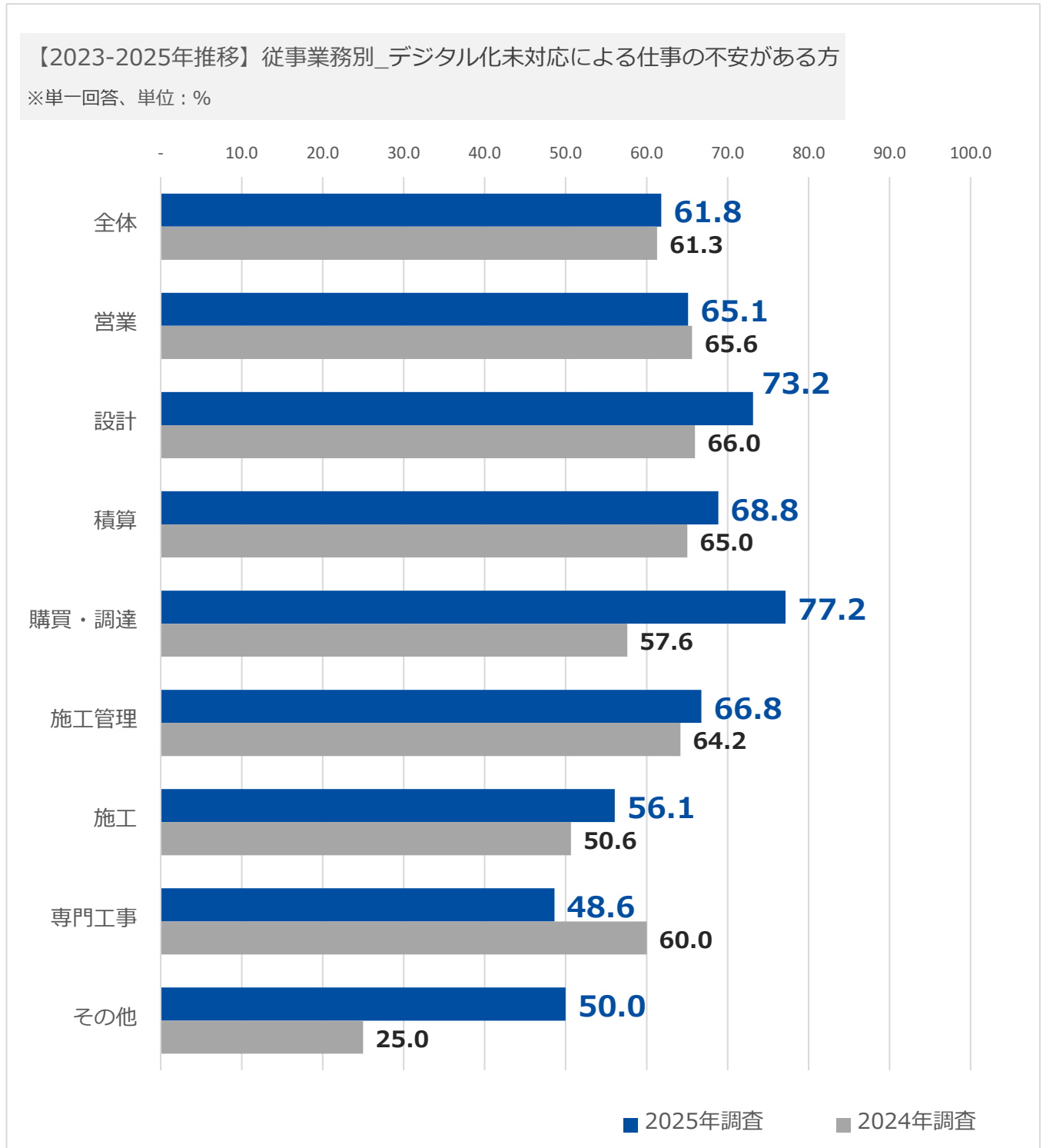
「デジタル化に対応できないと将来仕事が減るのでは、という不安」がある方は全体の 61.8%でした。2024 年調査とほぼ変わらない結果となったことから、依然として、今後はデジタル対応が必要であることは、半数以上の建設業界従事者において認識されていると推測できます。

【2023-2025年の推移】 デジタル化未対応による仕事の不安 ※単一回答、単位：%



5-1. 従事業務別（デジタル化未対応による仕事の不安）

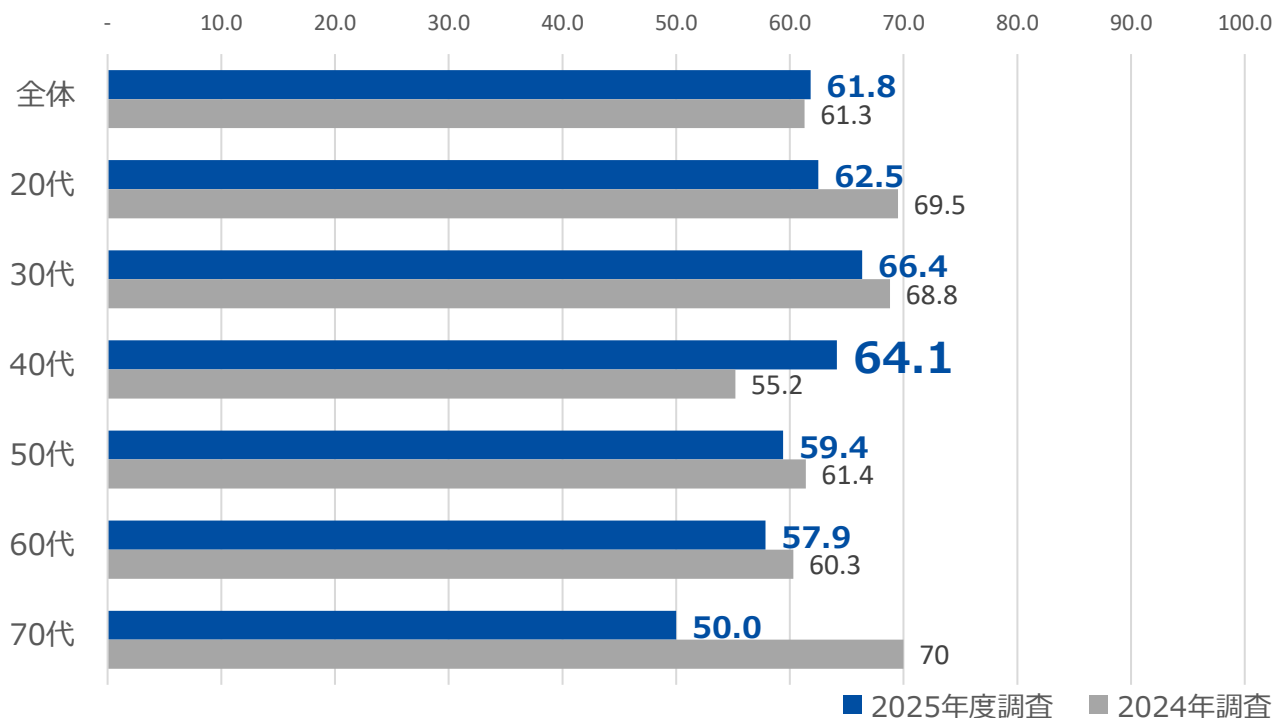
従事業務別に「デジタル化未対応による仕事の不安がある方」の割合を前年と比べてみると、専門工事だけ、前年よりも 11.4 ポイントも減少していることがわかりました。「2. アナログ業務が多く効率化が遅れているプロセス」の 3 位に「施工・専門工事（27.2%）」が上がっていることから、専門工事に関わるプロセスのデジタル化が遅れていることから「デジタル化への対応」について他の業務従事者よりも不安感が少ないのではないかと推測できます。



5-2. 年代別（デジタル化未対応による仕事の不安）

年代別に「デジタル化未対応による仕事の不安がある方」の割合を前年と比べてみると、40 代だけ前年よりも 8.9 ポイントアップしていることがわかりました。

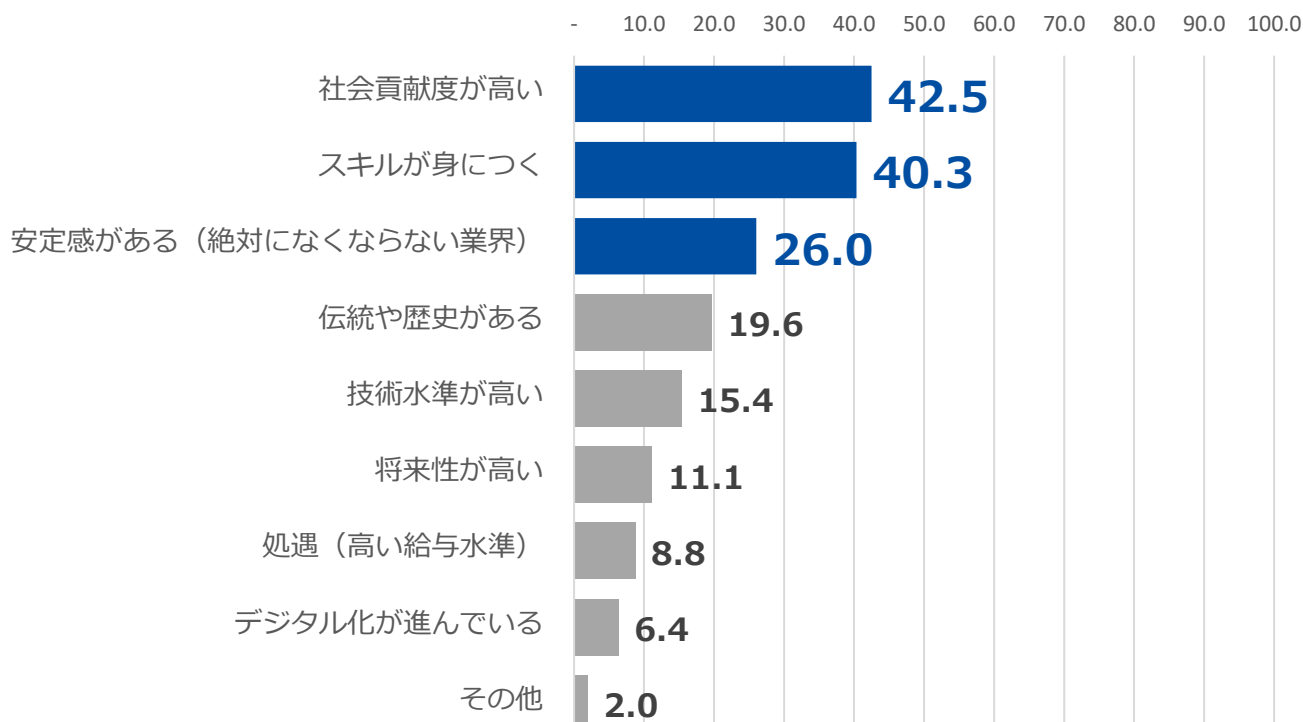
【前年度比】年代別_デジタル化未対応による仕事の不安がある方 ※単一回答、単位：％



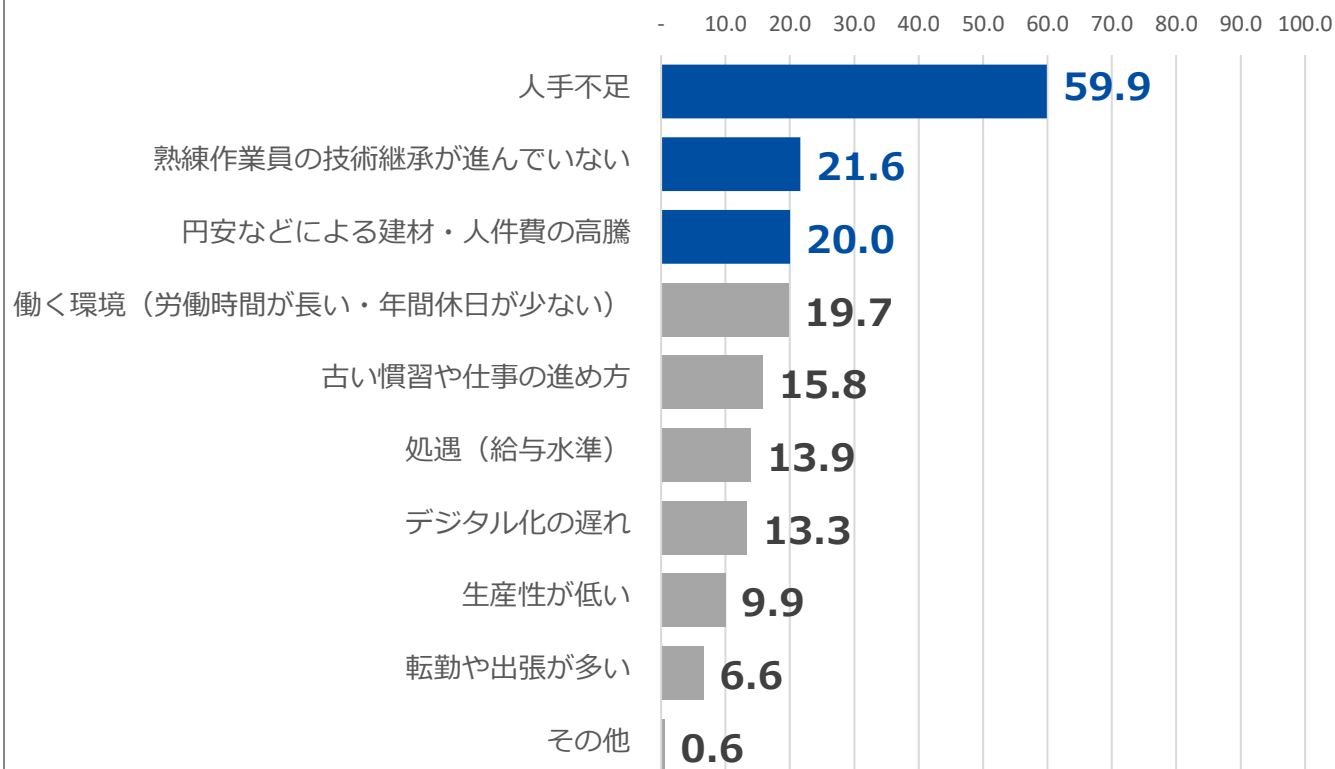
6. 建設産業従事者が誇りに思っていることと「深刻な課題」

建設産業従事者が誇りに思っていることは「社会貢献度が高い（42.5%）」、深刻な課題は「人手不足（59.9%）」がトップでした。

【建設産業で誇りに思うこと】 ※複数回答、n:1257、単位：％



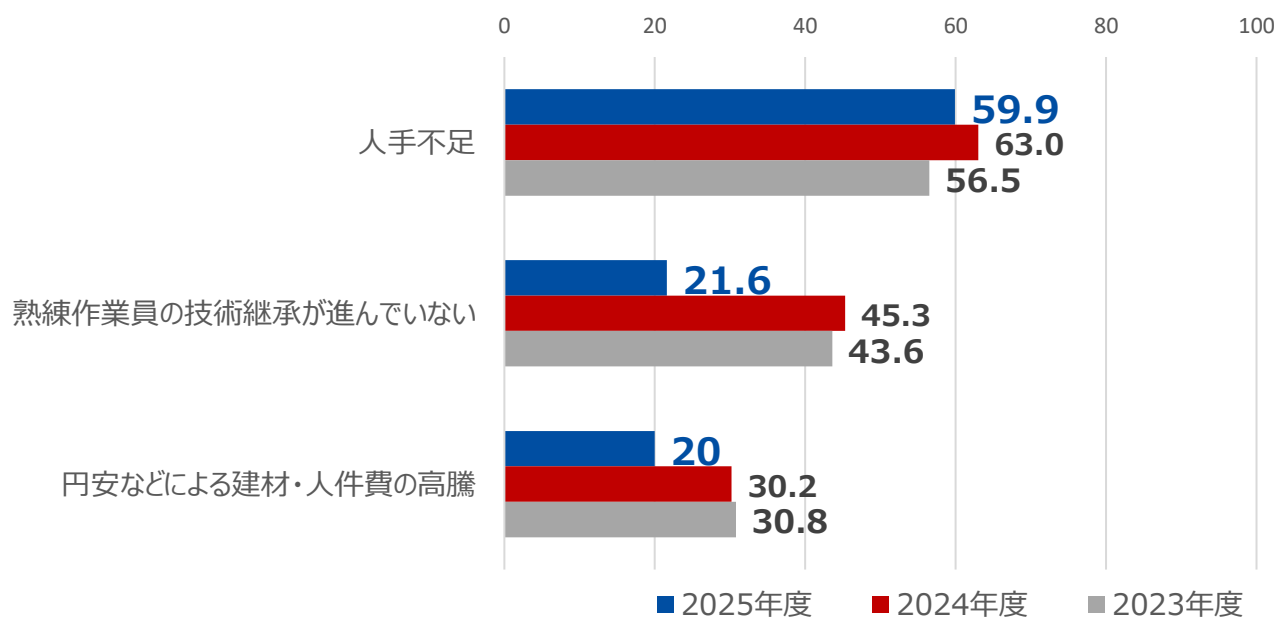
【建設産業の深刻課題】 ※複数回答、n:1257、単位：％



6-1. 2023 年～2025 年度比較（人手不足の深刻さ）

「建設産業の深刻課題」では、「人手不足」だけが、2023 年から 2 年間で 3.4 ポイントアップしていました。

【2023-2025 年の推移】 建設産業の深刻課題 TOP3 ※単一回答、単位：％



以上

【本件に関する報道関係者からの問合せ先】

野原グループ株式会社
マーケティング部 ブランドコミュニケーション課
担当：森田・齋藤・萩谷
E-Mail：nhrpreso@nohara-inc.co.jp